

参加型建築設計及びまちづくりにつなげる建築家の役割に関する考察：試行「Grove Dubー小石川ハウス alleyー」を事例として

メタデータ	言語: ja 出版者: 武蔵野大学建築研究所 公開日: 2024-03-15 キーワード (Ja): 住民参加型, 地域コミュニティ, まちづくり, 路地, 職能, 自主施工 キーワード (En): 作成者: 工藤, 聖奈, 水谷, 俊博 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000171

参加型建築設計及びまちづくりにつなげる建築家の役割に関する考察 —試行「Grove Dub—小石川ハウス alley—」を事例として—

A Consideration on the Role of Architects in participatory architectural design and community development
A case study “Grove Dub-Koishikawa House alley-“

工藤 聖奈*1 水谷 俊博*2
KUDO Seina *1 MIZUTANI Toshihiro *2

住民参加型 地域コミュニティ まちづくり
路地 職能 自主施工

1. 背景と概要

近年、住宅密集地において地域コミュニティの形成や維持が難しくなってきたり、今後もさらに困難となると想定される。このような状況で、参加型建築設計手法により、まちづくりに対する住民の意向を収集し、地域の特長を建築設計及びまちづくりに反映させていく事例もみられる。本稿では、参加型建築設計手法における運営段階での住民参加を想定し、施工後、住民自らが状況によって空間を可変させて使用できる小建築の提案をおこなう。東京都文京区小石川の低層住宅密集地にて設計及び自主施工をおこなった、試行「Grove Dub-小石川ハウス alley-」の実践を通して、小石川ハウス周辺地域の住民のつながりを形成するきっかけをつくるとともに、参加型建築設計及びまちづくりにおける建築家の職能の可能性についても考察する。

2. 参加型建築設計事例研究

建築雑誌「新建築」に掲載されている2000年～2022年までの参加型建築設計の事例を中心に分析をおこなう。建築過程における関係者の関わり方を理解するため、対象事例全てにおいて、組織ダイアグラムを作成(図1)した後、「建築過程の登場人物」「住民参加がおこなわれた建築段階と、住民参加方法の分類」「組織ダイアグラムの体系化」の3つの観点より分類をおこなった。作成にあたっては、「新建築」の文章から住民参加に言及されている箇所を抜き出し、言葉からどのように住民参加がおこなわれているかを考察したことを基にしている。住民参加はどの建築段階でもおこなわれており、住民の意向の収集方法としては、ワークショップの開催に加え、近年では設計者が住民の暮らしに入り込み、対話を重ねている。

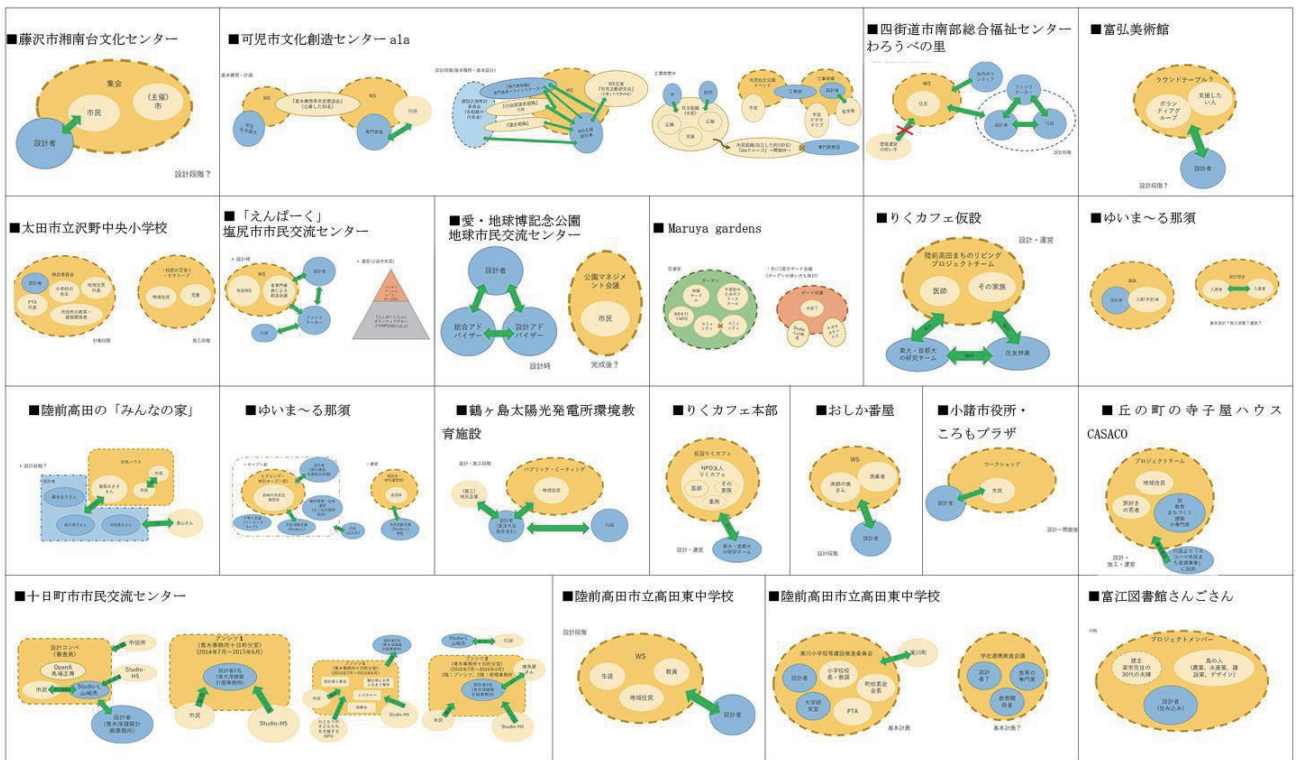


図1 参加型建築設計事例における組織ダイアグラム

*1 東京電力ホールディングス株式会社 (工学研究科建築デザイン専攻修了) *2 工学部建築デザイン学科教授

3. 試行「Grove Dub—小石川ハウス alley—」

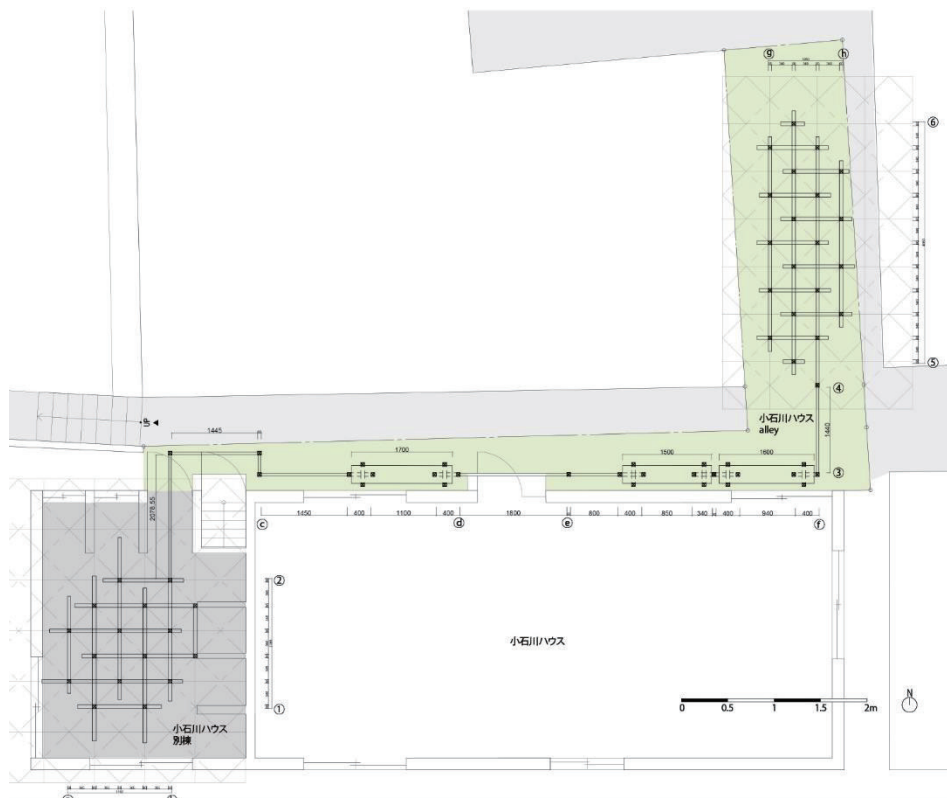


図2 「小石川ハウス alley・小石川ハウス別棟」全体平面図



図3 『The Grove-小石川ハウス別棟-』



図4 『Grove Dub-小石川ハウス alley-』
敷地内通路(上)・玄関前通路(下)

3.1 概要

敷地は都内文京区後楽園駅から徒歩からほど近い、低層住宅密集地に建つ築60年ほどの木造2階建て住居(小石川ハウス)の一室(図2・濃灰色箇所、図3)(The Grove-小石川ハウス別棟-)と敷地内通路(図2・緑色箇所、図4(上))(Grove Dub-小石川ハウス alley-)。室内と敷地内通路にはそれぞれ、施工後、住民自らが状況によって空間を可変させて使える小建築の設計及び自主施工をおこなっており、玄関前通路(図4(下))の木造作物は室内と敷地内通路をつなぐ役割を担っている。小建築や木造作物が、周辺住民同士のつながりをつくり、コミュニティが育つきっかけとなることを目指している。

支柱を800mmのグリッド状に配置し、支柱同士の上部を横材で固定することで、人々が自立した支柱の間を通り抜けることが可能となり、木々の中のような居心地を演出している。さらに、支柱の間においてさまざまな高さレベル(766~399mm)で天板をはめ込む(例えば、天板は椅子やテーブル、展示台として機能する)ことで、周辺住民が集まる人数や目的に応じて、空間を多様に変化させることができる。

3.2 小建築の展開その1—敷地内通路

敷地内通路は、小石川ハウス周辺住民の通路としての役割を維持しつつ、周辺住民が個々の居場所として利用しながら、お互いがコミュニケーションをとるきっかけとなる小建築を提案した。

3.2.1 コンセプト

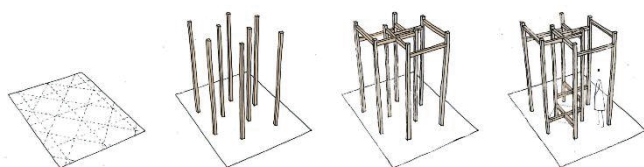


図5 コンセプトダイアグラム

3.2.2 接合部詳細

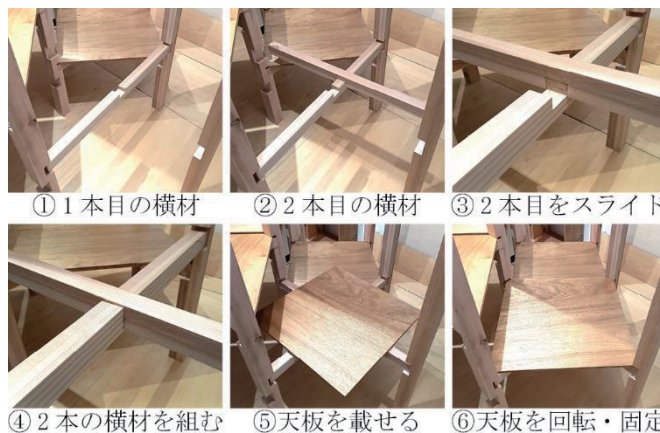


図6 横材と天板の取り付け方法

天板を取り外し可能とする方法として、欠け込みした支柱に、十字相欠き継ぎした横材をはめ込み、横材の上に天板をのせるという容易な接手法(図6)をとることで、

平面のレイアウトを周辺住民自らが自由に変えることができるよう工夫している。また、容易な接合手法でありながらも、2本の横材を組むことで x・y 軸方向に動くことを、天板の角と支柱の欠け込み（H=57mm）に合わせることで、z 軸方向に動くことを、天板設置後ダボを所定の位置にはめ込むことで天板が回転することを防いでいる。

3.2.3 小建築における空間の変化パターン

天板 535×535mm の大きさにすることで、テーブルや椅子、台などとして利用することができる。さらに、天板を厚さ t=12mm の合板とすることで、小石川ハウス周辺住民が1人でも容易に天板の取り付けや取り外し、持ち運びができる大きさ及び重量としている。天板は高さ H=399・500・655・755mm の4種類の高さにはめ込むことができ、はめ込む高さや位置の違いによって、空間が変化し、多様な使い方を実現している。本稿では敷地内通路の小建築における空間の変化パターンとして、代表的な6パターン(図7)を提示する。

〈パターン1〉は、支柱のみ配置し、天板と横材をすべて取り外したパターンである。「Grove Dub」の基本形であり、支柱の間を縫うように通行することが可能である。

〈パターン2〉は、テーブル1つと椅子1脚の組み合わせが、2セット設置することができるパターンである。1

人での利用が可能であり、通路も広く確保できるため、通行人が立ち止まって、着座している人とのコミュニケーションをとることも可能である。

〈パターン3〉は、テーブル1つと椅子1脚の組み合わせが、3セット設置することができるパターンである。異なる3人がそれぞれ1人で利用することが可能であるが、テーブルに向かう方向が全て異なっており、また四方を支柱に囲まれるため、周囲の様子を感じながらも一人の時間を集中して過ごすことができる。

〈パターン4〉は、1つのテーブルを囲むように椅子2脚を配置する組み合わせが2セット設置することができるパターンである。2人での利用が可能であり、異なる2人組が同時に利用することができる。

〈パターン5〉は、着座できる最大人数である5人での利用を可能とするパターンである。1列に並んだテーブルの片側は椅子、もう一方は通行できるようになっているため、着座している人と通行人とのコミュニケーションが取りやすい配置である。

〈パターン6〉は、高さ 399mm に天板を3か所取り付けつけたパターンである。連続して天板を取り付けていないことで、天板の周囲を通行することができるため、展示台や椅子として利用することができる。

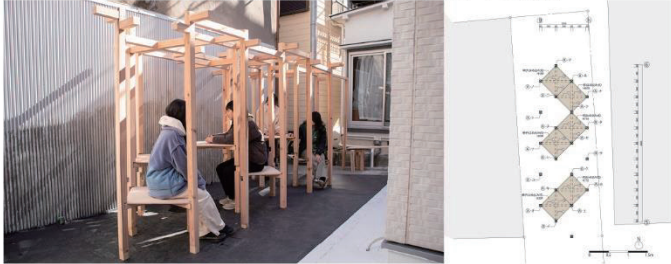
〈パターン1〉天板と横材を取り外した場合



〈パターン2〉机1つと椅子1脚のセットが2セットの場合



〈パターン3〉机1つと椅子1脚のセットが3セットの場合



〈パターン4〉異なる2人組が2組利用できる場合



〈パターン5〉着座できる最大人数5人での利用の場合



〈パターン6〉椅子が3脚の場合



図7 敷地内通路の小建築における空間の変化6パターン（各パターンの様子と平面図）



図8 玄関前通路一立面図

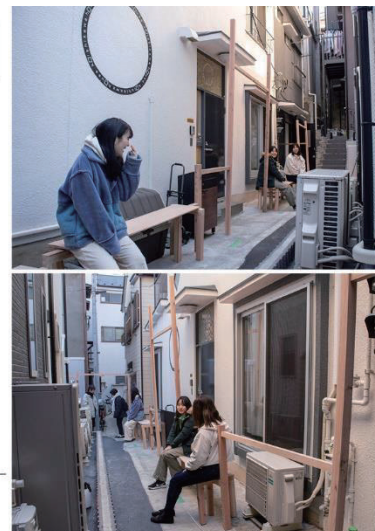


図9 住民の交流の場

3.3 小建築の展開その2—敷地内玄関前通路

玄関前通路は、小石川ハウスの外壁に沿うように木造作物を設置している。通路幅の狭い玄関前通路は、通路としての機能を優先させながらも、小石川ハウスの窓に連続するようなかたちで合板(t=12mm)を設置することで、例えばベンチとして機能し、小石川ハウスの住民と周辺住民が交流できる空間を実現している。(図8・9)

また、玄関前通路は、室内と敷地内通路をつなぐ役割として、室内と敷地内通路に設置した小建築と連動した木造作物にすることで、住居と周辺地域とのつながりがうまれる可能性も示している。

4. 総括と展望

本稿では、小石川ハウス周辺住民が集まる人数や目的に応じて、シンプルな木のフレームのなかで、さまざまな高さレベル(766~399mm)で天板と横材をはめ込み、平面のレイアウトを自由に変えることのできる小建築を通路に設置することにより、通路という低層住宅密集地の余白に、周辺住民同士がつながるきっかけとなる場を提示した。今後、住民が日常のかつ継続的に平面のレイアウトを変えようという行為をおこなうことを通して、まちづくりに住民が参画できる可能性をつくりだせると考える。

また、本プロジェクトは研究室の活動に理解のある土地所有者と話し合いながら計画を進めており、本プロジ

ェクトにおける組織ダイアグラムを「設計」「施工」「運営」の3つの段階に分けて作成した(図10)。設計段階では、設計者が考えたデザイン案をたたき台として、土地所有者と話し合いながらデザイン案をより地域に合わせたかたちに近づけた。現地での施工段階では、土地所有者を通じて小石川ハウス周辺住民のご協力をいただきながら、部材の組み立て作業においては研究室の学生が加わり、小建築を実現させている。運営段階においては、今後も研究室を通じて継続的に地域への働きかけを計画している。住民の意向や地域の特長を収集及び分析し、さらに地域に合わせたまちのコミュニティ再生へとつながる拠点へと展開する計画を考えている。

謝辞

本プロジェクトを遂行するにあたり、多大なるご協力をいただいた木村浩氏、現地での制作にあたってご理解くださった小石川ハウス住民及び小石川ハウス周辺住民の皆様に感謝いたします。

参考文献

- ・布野修司：裸の建築家—タウンアーキテクト論序説, (株)建築資料研究社, 2000年3月10日
- ・高野洋平：公共施設計画における市民参加の持続性に関する研究, 2016年1月
- ・株式会社新建築社：新建築 (23冊)
- ・本稿における写真は武蔵野大学水谷俊博研究室の提供、図は筆者作成による。

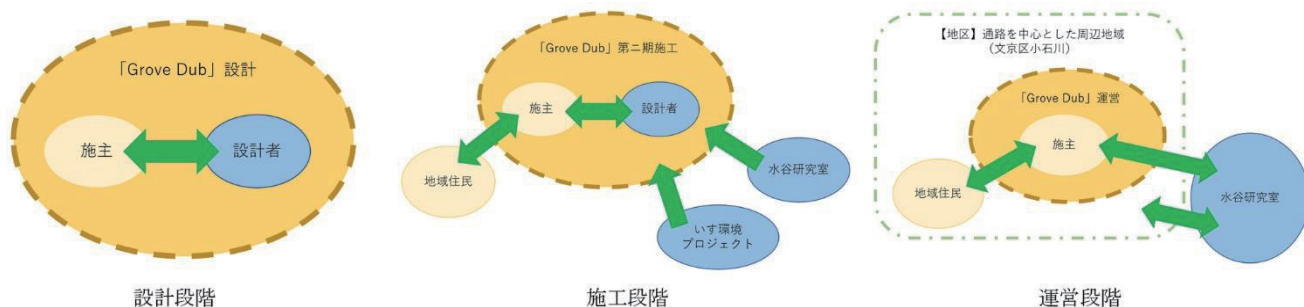


図10 「Grove Dub-小石川ハウス alley-」における組織ダイアグラム